
白き書の物語

壊乱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白き書の物語

【Nコード】

N3297J

【作者名】

壊乱

【あらすじ】

踊らされる駒であると気づいたとき、私は今を見捨て、未来を求めた。

プロローグ（前書き）

デモンベインといえない何かです。
原作を愛される方は戻るを選択することをおすすめします。

プロローグ

白い本に血が落ちる。

暗い地下室の床に刻まれた、精密緻密な魔法陣が刻まれている。

そしてその中心に置かれた、白い白紙の魔導書。

表紙は白く、中にもなにもかかれていない。

杖を構え、呪文を唱える。

「白き書に刻む、我が魂、我が記憶。

白き書に刻む、我が外道の知識、我が秘技の全て。

白き書に刻む、我が血、我が命。

叶えよ、我が誓い、我が願い。」

魔法陣の輝きが増す。

陣を魔力が駆け巡る。

光は収束し、白き書に契約が刻まれる。

「これで、準備は整った。」

本を持ち、部屋を出る。「いくぞ、アル・アジフ」

「わかった、我が主よ。」

己の魔道書と共に、死地へと向かう。

戦い、闘い、争^{たたか}った。

無限の無限、時を、世界を越え、辿り着いた地球。

ギリギリのところまで踏ん張っているが、アイオーンもぼろぼろ、魔力も底をつかんとしている。

そして振り返れば、敵がいる。

輝くトロペゾヘドロンを構える黒き王。

こちらも輝くトロペゾヘドロンを引き抜く。

しかし、それだけで体は砕け散りそうになる、振るえば、間違いく死ぬ。

「これで終わりだ、永劫。」

仇敵、マスターテリオンが叫ぶ。

しかし、私は冷めたものだ。

「残念だが、マスターテリオン、お前の永遠はまだ続けて貰う。」

「…何？」

「今回はここで仕舞だ。」

「主？」

「すまん、アル・アジフ、おまえを裏切るようなことをする。」

「何を!？」

アル・アジフが外に放り出される。

「そして、邪神。おまえの思いどおりにはならん。」

そして、アイオーンのコックピットに輝くトロペゾヘドロンを突き立てた。

金の輝きが、私を否定する。私の存在を否定する。

この宇宙から私が弾き出される。

しかし、その前に私は、輝くトロペゾヘドロンの過負荷によってその命を失っていた。

そして白き書に刻まれる。

その在りようが、その力が、その願いが、その記憶が。

それは明ける事なき闘争の書。

それは終わり無き夜の書。

それは抗いの、それは怒りの、それは…白き天の書。

その表題に刻まれしは銀色の文字。

白夜の書。

その魔道書はそう名付けられ、その名のままに在ることを義務づけられた。

白き太陽は遠く地平に輝き、戦いの夜は明けるとを知らない。
抗い、戦い、いつの日か神の打倒される日が来るまで、安息の眠り
は訪れない。

これは、神の台本より抜け出したある一人の魔術師の物語。

第一話

目を覚ますと、そこはどこもしれぬ、図書館だった。

暗い夜の闇の中に、本、本、本、本の積まれた棚が、林のように立ち並ぶ。

周囲を精査すると、大気に満ちる魔力を感じる。

魔術的に恵まれた世界なのだろう。

本棚に納められた本体を浮かし、抜け出す。

どうやら問題なく動いているようだ。

あの世界において、私は自らの死をトリガーに起動した魔術により、魂をこの本、白夜の書に写した。

言うなれば、魂のコピー。

魂自体はすでにどこぞへ消えたが、人格、知識、記憶、思考回路までほぼ完全に写された今の私は、元となった自分と同じように行動できる。

そう、すべては邪神を倒すために。

いつ気づいたかは覚えていない。

いつの間にかこの世界が繰り返しているのだと漠然と感じていた。

それは、マスターテリオンの言葉や、行動する中で感じる小さな既視感の中に感じる違和感。

曖昧な欠片をつなぎあわせ、足りない部分を想像で補い作り上げた、余りに不格好な仮説。

しかし、私は輝くトロペゾヘドロンの出現に確信を抱いた。

輝くトロペゾヘドロンは、旧支配者を封じたという伝承がある。

総てをつなぎ合わせ出来上がったのは、ピースの欠けた、しかし、矛盾のない全体像。

それを見たとき、私は愕然とした。

なぜなら、自分ではどうすることもできないこと悟ったからだ。マスターテリオンに打ち勝てるかと言われても、シャイニングトロペゾヘドロシカ、あの魔神に勝つ方法は思いつかない、しかしそれは邪神の謀略に従うということ。

自分に打てる手はない。

せいぜい、踊らされることしか私にはできないと悟った。

故に、最後の最後に自分をあの宇宙から否定した。

そして、邪神に打ち勝つ力を得るために、異なる世界を巡る旅に出ることにしたのだ。

無駄になる可能性が高く、無意味に終わるかもしれない。

逃げ出した、ということもできる。

しかし、あそこで世界を終わらせるよりはまだましだ。

時間があるかは分からない。

故にあまり時間をかけずに、神に対抗しうる何かを見つければならない。

世界が終わってしまう前に。

周囲に人がいないのを確認した私は、自分の体を構築する。

書のページと魔力で編まれた体。

服も一緒に作り、とりあえずは問題はない。

まずは現状の確認。

案内板はクイーンズイングリッシュでかかれている。

おそらくはイギリスで間違いないだろう。

幸い英語に関しては問題ない。

本棚を流し見れば、魔法戦闘理論、精霊との契約、魔法は正義なのか、などといった魔術、いや魔法に関する本がずらりと並んでいる。中には魔力のこもった魔道書もある。

しかし、魔力はあれど、演算能力を持っているものは見当たらず、魔道書とは呼べないものしかない。

世界の違いという奴か、それともただ単にここにはないだけか。
まともな魔道書という奴は世界中に百とない。

ここになくてもおかしくはないといえよう。

とりあえず納得し、棚から幾つかの本を抜き取る。

そこに書かれていたのは、あの世界の魔術とは似ても似つかぬ魔法理論。どうもここにあるのは上級者向けのようだ、基礎については書かれておらず、個人が自分の研究成果をまとめたというものや、魔法を用いた戦闘理論、それから正義について書かれた道徳書、なぜこんなものがこんなところにあるんだ？

まあ、というようにこの世界の魔法を知らないものが見ても、チンパンカンパンだというわけだ。どうやらここは禁書庫だったらしい。仕方ないのでここを出ようとしたところで足音が近づいて来るのに気づいた。一人ではなく二人、それを追いかけるもう一人。

気配を消して暗がりから覗くと、見えたのは追いかけられている子供。

目の前を通り過ぎようとする二人をとっさに掴み引き寄せる、さらにニトクリスの鏡の記述を用いて、目の前に本棚の幻術を出現させる。

「な、なにふむうつ」

「むっ、むぐうつ!？」

「静かに」

二人の口をふさぎ、黙らせる。

追いかけていたもう一人は、こちらに気づくことなく通り過ぎていった。足音が遠のいたのを確認し、二人の口から手を離す。

「ぷはっ」

「もう、何なのよ、あんた!？」「あまりうるさくするな、また戻ってくるかもしれない。」

少女の方は騒ぎですが静かにさせる、見つかるのは願い下げだ。

「あなた…だれ」

落ち着いたらしい少女は、少年の前に立つ。目の前にいるのは不審

者だということを思い出したらしい。

さて、どう答えたものか。

「ふむ、なんだと思う？」

「不審者」

「なるほど、その通りだな、おまえたちの目の前にいるのは、なぜか子供を助けるような不審者だ」

「わけがわかんないわよ」

「つまりお前達は私に恩があるというわけだ。」

「なによ、こどもにたかるき？」

「いや、少し手伝ってもらいたい。」

そう言うと、少女の瞳に不信感が火となり灯る。

「てつだうってなにを？」

明らかに警戒している。後ろにいる少年をいつでも逃がせる様に構えている。

どうでもいいが、女の子に守られる男の子というのはどうなのか。

「なに、簡単なことだ」

「……………ゴクッ」

「魔法の初級教本なんかを持ってきてくれないか？」

「……………はぁ？」

「別に今すぐでなくていいぞ、そうだな明日の夜ぐらいにでも持つてきてくれればいい。」

「なんで、そんなのを？」

「ここにはなからだ。」

「…ふう、あっそう。なんかもうどうでもいいわ。」

「できないか？」

「できるわよ！ それぐらい」

「では頼む」

そう言うとなぜか少女はガックリと肩を落とす。少なくとも警戒は解いてくれたようだ。

「はぁ、なんか疲れた」

そう言ってとぼとぼ歩いていく少女。

「あの、」

「ん？」

少年がこちらを見ている。

「なにかね？」

「ぼく、ネギ・スプリングフィールドっていいいます、あなたの名前はなんというんですか？」

「まだ小さいのにずいぶんとしっかりしている。しかし、そうだな、名前か……」

以前の名前、正確にはオリジナルの名前はある。しかし、それはオリジナルの名前であって、私のものといえるのか。

あれの総てを私は受け継いだが、名前ぐらいいは残してやってもいいだろう。

「そうだな、私の名前は……ミッターナハツゾンテ、長いか、ターナでいい」

「何やってるのよネギ、早く寝ないと明日寝坊するわよ！」

「わかったよ、アーニャ。それじゃあターナさんまた明日」

「ああ、お休みネギ。」

軽くお辞儀をして去っていくネギ。大きくなれば英国紳士と呼ぶにふさわしい青年になるだろうと感じられた。

この出会いが、運命の出会いだったとは、この時気づくはずもなく。夜は静かにふけていくのだった。

第2話

あの邂逅から、ネギとアーニャは夜に禁書庫に通うのが日課となった。

ネギ達が来るのは夜、ターナをほかの場所で見ることがない。必然的に夜にしか会わないことになる。

ターナはいつもそこにいて魔法の練習をしているか、教本を読んでいる。

杖はネギの持っていた予備のものを借りた。

最初、ターナはからきしに魔法が使えず、アーニャに笑われたりもしていたのだが、次の日にはもう基礎の「火よ灯れ」を完全にマスターし、さらに一週間もすると、魔法の射手を使いこなすようになった。

その習得速度は異常と言ってよかった。

「あんだ、なにもん？」

「前にアーニャに聞かれたときに、答えたと思うが？」

「あれはわたしがいったこと、そのままこたえたんじゃない。

ちゃんとこたえなさいよ」

魔道書を開き、ノートに書き写していたネギも、その手を止めてこちらを振り向いていた。

「ふむ、君たちは、物に魂が宿るといふ言い伝えを知っているかね？」

「ごまかすんじゃないわよ」

「ごまかしているわけじゃない」

「あ、あのおとぎ話とかでなら。」

「そうか、実を言うと私は人間ではない」

「へ？」

「え？」

「私は魔道書」

言葉とともに体の構成の一部を解く。

ページがバラけ宙を舞う。

「知識の収集のために、作者自身の魂を写し取った。異世界の魔道書だ」

体の半分が本のページに変化し、周囲を舞うその光景はあまりにも異質で特異で幻想的で、二人は声を失った。

「まあ、未だ生まれて一年も経っていないのだがな」

体を構成し直しながら軽く言うのと、二人は落ち着いてきたのか、緊張をといて大きく息を吐いた。

「そんなほん、きいたことないわよ」

「異世界の魔道書と言っただろう。この世界になくとも何らおかしくない」

「もう、どうでもいいわ」

アーニヤは疲れた顔をしてため息をついた。

「いせかいの、まどうしょ。」

「ん？」

「いせかいからきたのなら、いせかいのまほうをしっているんですか？」

何かひどく真剣で、焦っているような声でネギは問うた。

「まあ、な。」

「それは、つよいですか？」

「物にもよるし、使う奴にもよる、一概にはいえないが、まあ今私ができる物よりも、強いのは確かだ」

「それをおしえてくれませんか？」

「却下」

一考の余地もなく、瞬間的にターナはネギの願いをはねのけた。

「な、なんですか」

「私のいた世界の魔法、いや魔術は、この世界のように優しくはないんだ。

それは外道の知識、邪悪にして醜悪、人の心と魂を侵し闇に染める

外宇宙の神々の知識だ。まともな人間なら、魔道書を読むだけで発狂するし、力を得た物の大半も闇に心をとられ、悪意に身を任せてしまう。

わかるか、ネギ。私の持つ知識はお前の目指す立派な魔法使い（マギステル・マギ）から程遠い、否、対極に属するものだ。そんな物を得てどうするという。」

「で、でも」

「それでもなお、お前は力がほしいのか？」

「……」

ネギは黙り込んでしまった。

「ふう」

この何ともいえない空気を、私はどうすればいいんだ。

「ネギ、この世界の魔法は、別に私の世界の魔術に劣っているわけではない。むしろ良い部分も多い。必要のない危険を負う必要はないだろう？」

「…はい」

まだ納得したという感じはしない。

どうしたものか。

「ネギ、どうしても力がほしいのか？」

「……」ふう。

内心で私は諦めのため息をついた。

荒治療になるが、仕方ない。

「わかった、そんなに力がほしいのなら、お前を試してやろう。」

「え？」

「私というの魔道書を読んで見せろ、できたら私の主に認めてやる」
そう言って体の構成を完全に解く。

ページが渦を巻き一冊の本に収まっていく。

局地的な嵐が収まると、そこには白い魔道書が浮かんでいた。
表題には白夜の書と書かれている。名前の通り、燃えるように白い表紙をしており、凄まじい魔力が込められているのがわかる。

そして、そこから発せられる雰囲気。

暗く、ドロドロとしていて、冷たく、重く、でも熱い。死の冷たさと、暗鬱とした粘着質の感情の熱さを感じさせる、そんな本だった。ネギは身を竦ませた。

背筋には氷をあてがったように震えが走り、心臓が壊れたように早鐘を打つ。

開いてすらないのに、これほどの威圧感。

すでにネギは足下がおぼつかず、今にも倒れてしまいそうだ。

実際、ネギは体を支えていられず、立っていることができなかった。

「おっと」

とっさに体を構築し直したターナがその体を支える。

「はっ、はっ、はっ、はっ、」

荒い息をしているネギをなでながら、落ち着かせる。

「わかっただろう、止めておけ、お前には無理だ」

ネギはどこか脆いところがある、心に傷があり、闇が巣くっている。それではだめだ、この程度で闇に心が飲まれるかける様では魔術は使えない。闇に身を浸しながらなお自分を見失うことのない強い心が必要なのだ。

「はあ、はあ」

どうにか落ち着いたネギは、暗い顔をしながら部屋に帰っていった。

「……………」

「なによ」

「いや、止めるかと思ったんだが、何もしなかったんでな」

「べつに。あいつはいつてもやめないもん、だからいちどいたいめみればいいんだわ」

「ふむ、そうか……一つ聞いてもいいか？」

「なに？」

「なぜネギはああも生き急ぐのかをだ。頭がいいとはいえまだ六才だろう」

アーニャは少し複雑な顔をしたが、静かに、ゆっくりと、語りだし

た。

「あいつのおとうさんはね、えいゆうってよばれてたの。だけとあいつがこどものころに、死んじゃった。

あいつ、こどもだったからそのことをわかんなくて。

じぶんがピンチなときにきつときてくれるっていいだして」

「……………」

「なんどもあぶないことしたわ、木からとびおりたり、きょうぼうな犬のたづなをきったり、ふゆのみずうみにとびこんだり。

それでね、それから少ししてね。ネカネお姉ちゃん。ああ、ネギのいとこのことね、そのひとがむらにかえってきたのよ。だけど、その日まぞくがむらをおそったの」

「！」

「そのときわたしはもうここにきてたから何ともなかったんだけど、あいつとネカネさんは巻き込まれて、そのあとのことはよくしらない。でも、わたしのおとうさんとおかあさんやむらのみんなは石になっちゃった。」

「石に？」

「そういうまほうがあるの。それであいつ、そんなことになったのはじぶんのせいなんじゃないかって。それで…」

「力を求めるか…」

重い沈黙がのしかかってくる。私もかなりひどい目にあったが、子供の時にこんな目に遭うのは辛いことだろう。

自分の罪だという思いこみが、あいつを追い立てる。

そしてこいつも、

「済まないな、お前も辛いだろうに」

「えっ！」

アーニヤを抱き寄せてやる。

「なっ、何するのよ!？」

「泣いていいんだぞ」

「泣いたりなんかしないわよ…」

「泣いていいんだ」

「べ、べつに泣いたり、なんか」最初は否定していたアーニヤだったが、しばらくそうしていると、言葉が震えはじめ、言う端から涙がこぼれていき、そしてすぐに堰を切ったように大泣きをする。

私は消音の結界を張って、アーニヤが泣き止むまで抱き締めてやった。

「く、屈辱だわ」

ようやく泣き止んだアーニヤは、涙を拭きながら恥ずかしさに顔を真っ赤にしていた。

何せ泣き顔をみられたのだ、しかも大泣きのだ。

「泣くことを恥ずかしがる必要はない。感情の高ぶりから流す涙は心の証だ。それは人にだけ許されたもの、ほかのどんな生き物にも持ち得ない、尊いものだ」

「……………」

しかし、この男、こっぴどかしい言葉をすらすらと並べやがって。まあ、何とか心にたまった暗いものがきれいさっぱりなくなった。

清々しい気分だ。今日はなんだかいい夢を見れそうだ。

そんなことを考えていると。

チュンチュン

「ん？」

窓の外から鳥の鳴き声が…。

…………。

…………。

.....。

はっ！

「やばっ、もう朝じゃない！」

あわてて私は禁書庫出る。だが扉の前で私はちよっただけ立ち止まって、振り返らずいった。

「…ありがとね」

ぼそりといった言葉が、相手に届いたかはわからない。

私は顔を真っ赤にしながら寮へとかけていった。

あわててかけていったアーニャを見送った私は、オリジナルの自分の相棒をしていた魔道書のことを思だしていた。千年の長きに渡り、人の死を見続け、世界のために戦い続けた少女のことを。子供ではないと言い張っていたが、精神構造は間違いなく子供だった。

結局、最後に裏切ることになってしまったあの少女。

私はあの少女の空虚を癒せただろうか？

もはや確かめられるはずもないことを、つい考えてしまう。

「ふっ、未練だな」

世界を救い未来を奪い返すために、私は今を捨てたのだ。

捨てれば取り戻せぬと知っていたのに。

自嘲してしまう、合理的ではない、だがこの不条理が人の証なのだろう。

ならば私はいまだ人なのか？

朝焼けを見ながら、私はそんなことを考えていた。

3話（前書き）

不定期に更新します

3話

あれからさらに一ヶ月、魔道書であるターナは禁書庫にある研究書にまで手を出していた。

最初はネギの付き添いをしていただけだったアーニャも、今では魔法の研鑽に勤しんでいる。

ネギも、いまだにこちらをちらちらうかがっては暗い顔をしたりするが、概ね関係も修復されていた。

「ネギ」

と呼べば。

「な、何ターナ？」

と呼び捨てで返してくるくらいにはなった。

今ネギが読んでいるのは、ウェールズのこんな山奥にまで運ばれてくる、根性のある新聞だ。

先日、魔術の力を何に使っていたのかを聞かれ、自分のためと答えたところ、何故か正義とはいかなる物かという、人間の心の根底に横たわる真理についての大論争となり、結果。ネギはまず知識だけでも広げることに決まり。その手段の一つとして新聞を読むようになった。

しかし、六才の少年が新聞を広げ、読んでいるその姿は似合わない。禁書庫で魔法の勉強をしているのも似合わないが……まあそれはいい、今はそんな現実逃避じみた説明は必要ない。

「ちょっと貸してくれ」

「え、あ、うん、いいよ」

差し出された新聞をひったくり、そのある一点を凝視する。
別に大した記事が載っているわけではない。

新聞に限らず大抵のメディアならほぼ間違いなく知ることのできる
極普通の情報ばかりだ。

しかし、その中に見過ごすことの出来ないものがあつたという話だ。

「1998年…だと…」

そんなバカな、世界を越えること、時間を超えること、その二つは
全くの別物だ。

それか何故。

いや、シャイニングトロペゾヘドロンの力によって飛ばされたのは、
私自身でなく、オリジナルのほう。

どこでもない宇宙にたどり着く前に飛ばされたわけだから、これは
ランダムな跳躍？　つまり事故と言うことに…。

しかしいかなる運命のいたずらか、それともまた邪神の謀略？
いやしかし、いやしかし、よく生きていたな私…。

ガッン！！

「ぐあっ!？」

「こらっ！　こっち向け。」

突然後頭部を衝撃と痛みと怒鳴り声が襲う。

「な、いきなり何をする、アーニヤ」

「いきなり新聞をにらんでうんうんうなりだしたのはあんたでしょ。
どうしたってのよ、話さない。」

「大したことではない。気にするな」

反射的に動揺を押さえ込み、冷静な顔に戻る。

だが、アーニヤ相手に大した効果はなかったようだ。

「聞こえなかったのかしら、私は話さないと言ったのよ。話さないと言ったら話さない。」

あんたに拒否権はないわ」

「お、横暴だ…」

「さあ、さあ、さあ。早く言いなさい。」

ハリー、ハリー、ハリー！！」

何故か凄まじい剣幕で詰め寄るアーニヤ、そんなに気になったのだろうか。

「本当に大した話じゃない。ただ、そう、急がなきゃいけないと思っていた要事が、そんなこともなかったって言うだけのことだ」

そう、それだけのこと。もとの世界から来たときに、ついでに時間も二世紀ほど遡った、本当にただそれだけの話だった。

「ふーん、で？ たがらどうするの」

「うむ、それが問題だ…」

急がなければならない、急がなければならないと思っていたから、まさかこんなに時間が出てくるとは。

正直、思いもしなかった。

はあ

「本当に、どうしたものか…」

ここの蔵書を全て読み尽くしたら、次の場所に行く予定だった。

私の目的は一つ。

繰り返す世界を正常な状態に戻す。

そのために、邪神を倒しあの世界に手出しできないようにする。

それには、シャイニングトロペゾヘドロンではない何かが必要だ。

あれでは邪神を封じられなかったからこのようになったのだから。

それに、その前に元の世界に戻らなければならない。

しかしここで問題が一つ。予想外に時間を超えてしまったために、あの世界においての時間軸に戻るにはこちらの世界も同じ時間にならないと、戻れない、ということ。

当たり前ではある、世界を越えても、時間を超えられるかという話話が違う。

つまりあの世界に戻るには、だいたいこの世界で二世紀ほど過ごさなければならないというわけだ。

「悪運が強いとは言われたが、こんな幸運が俺に降り懸かっているのだろうか…助かるが」

「つまり…暇なのね…」

「そう…だな、その通りだ。無論、手を抜くようなこともないし、無駄な時間を過ごすつもりもないが、少し余裕ができた、多分そういうことだ」

「じゃあこうしない？」

ターナ、私が卒業したら修行についてこない？」

「修行？」

「そう、修行。立派な魔法使いに成るためには、卒業後修行が与えられるの…。それについて来ないかって聞いているの」

ふむ。

「ず、するいよアーニャ。それだったら僕だって…」

「こういうのは速い者勝ち、というかあんた前に断られてるじゃない」

「あれは、魔法を教えてもらうことで、このこととは別物じゃないか！」

ぎゃあぎゃあ喧嘩を始める二人。

修行についていく行かないは、まだ答えていないのに気の早いことだ。

……………良いのだろうか。

そんな平穏が私に許されるのだろうか。

私が求めるのは神に会って神を斬る、修羅の如き力。

それはこのような平穏の中で得られるのだろうか。

これならばむしろ、あの世界にて力を高めた方が、良かったのではないだろうか。

ふと考えてしまったその考えを振り払う。

如何なる理由があろうと、歩んだ道に戻ることはできない。意味のない感傷を捨てろ。

今ここで出来ることを目指せ。

そう心に刻む。

深く、深く。

第四話

あれから三年、私は図書館にある本も、禁書庫にある本も全て集積し、己の血肉とした。

まあつまり、彼処にある本すべて写したと言うことだ。

これは、最初から魔道書の機能としてつけられたものだ。

書そのものに理論を書き込むことで、魔法を覚えられる。

さらにデジタル化する事で、いくらでも書き込むことが出来る優れもの。

あちらの世界の、自称天才科学者に無理矢理つけられたものだが、存外役に立っている。

これにより、理論上はどんな魔術魔法も習得可能だ。

無論、得意不得意は出てくるが、手札が多いというのは悪くない。

その点でいえば、感謝するのもやぶさかではない……ただ、すべてアナログに手書きで書く必要があるのかははなはなだ疑問ではあるが。

今年はアーニヤとネギの卒業の年だ。ネギはアーニヤより一つ下なのだがなんと飛び級の上主席で卒業、その熱意と努力は疑いようもない。

しかし、やはり根底にある記憶が影響しているのか、自分より他人に重きを置いている感がある。そのあたり、アーニヤが心配しているのだが。

三つ子の魂百までもという、もはやあれは治らないだろう。あとはそのことと、どう向き合うかだ。

誰が口を出そうと意味はない、決めるのはネギだ。

そうそう、ちなみに卒業式に私は出なかった。当たり前である、そもそも私のことを知っているのはあの二人しかないのだから。不審者が魔法学校の卒業式にいたらまずいだろうと思い、窓から眺めるだけにしておいた。

そして、この日ネギは日本の魔帆良に、アーニヤはイギリスのロンドンに修行に行くこととなった。

さて、今に至る回想をしている私は、いつもの禁書庫にいるのだが、ネギとアーニヤの姿はない。

三年前にも起こった、私がどちらについて行くかを決める戦いを、私の意志を無視し再び始めたのだ。

何だ、この理不尽。

拒否権はなかった。

逃げたら、殺すとまで言われた。

もはや諦めの境地。

今ならシャイニングトロペゾヘドロンの操れる気がする。

はあ。

ここにいるのはあの二人の内、勝った方がここに来ることになって
いるからだ。

ここ三年の戦闘訓練を経て研磨された二人だ、その強さはかなりのもの。時々相手をしたが、最後の一年ではひやりとすることもあった。

その二人が戦うのだ、互いに手は知り尽くしているはず、やすやすとは決着は着かないだろう。

ちなみに、決闘が始まったのは零時、現在午前三時前。そろそろ決着がつくころだろうか。

ギィ

時計の針がちょうど三時を指したとき。

建て付けの良い扉が音を立てて開かれた。

振り返ると、扉の向こうにはマントもスカートもぼろぼろで、体中傷だらけのアーニャが立っていた。

「行くわよ」

目だけがギラギラと輝いていて、マスターテリオンに匹敵する威圧感を放っているその姿は。

正直、怖い。

「…はい」

つい正直に答えてしまっても仕方ない、仕方ないったら仕方がない。

はあ

結局、二人の勝敗を分けたのは心の差だったらしい。

最後、どちらもがギリギリの大魔法を放ち相殺、爆発。

爆風に襲われたとき、そこで引いて体勢を立て直そうとしたネギと、迷わず突っ込んで殴りかかったアーニャの違い。

まあ、ネギが悪いというわけではなく、まさに勝負は時の運だった

というわけだ。

そして今私は鞆に詰め込まれ、電車に揺られている。

正直、この扱いはどうなんだろう。

幾らチケットを買う金もつたいないからといって、仮にも師事した相手を鞆に詰めないでほしい。

そう私は言ったのだが。

「お金、あるのなら別にいいわよ」

と言われ、当たり前だが持ち合わせのない私は、黙って言われる通りにするしかなかった。

なんだか最近扱いがひどくなっている気がする。

ああこんなことならネギについて行った方がよかった。などと、早速後悔していた。

これは蛇足だが、本の形になった私は代金を払ってもらったためにネギの時のように脅しをかけたのだが、アーニヤはそれを無視して私を鞆に詰め込んだ。

魔法の才能はネギほどではないが、魔術師としてはもしかしたら……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3297j/>

白き書の物語

2010年10月17日02時16分発行